

イト（孔雀石）、デニムの加工に使う研磨剤のシリカによる肺の損傷、絡まりやすいため事故を誘発しやすいインド亜大陸の伝統的衣類、環境ホルモンとなるおそれがある臭素系難燃剤、Tシャツのスクリーン印刷に使われる環境ホルモンのノニルフェノールエトキシレート（NPE）やフタル酸エステル。最後にファッションによる犠牲者の出ない未来を願う言葉で締めくくられる。

本書の意義としては、第一に衣類に思いがけず潜む危険性に光を当てたことであろう。毒に注目した書籍は時々目にするが〔cf. 立木 1996; ハバート 2020; 船山 2008〕、本書の類書はないのではないかと。第二の意義は、女性が犠牲者になりやすい社会的な状況や風潮があったこと、立場の弱い労働者にも視線を向けていることだろう。ファッションは個人の選択だと思われがちだが、とくに女性はファッションナブルであることを求める圧力がかけられていたことを指摘している点は、大きな功績である。またファッション産業を支える人々の被害も明らかにし、現在でも続いていることに警鐘を鳴らしている。その一方で、水銀と砒素の使用を中止するまでのスピードと背景を考えたとき、水銀は着用者に明らかな症状が出なかったが、砒素は出たということで、砒素の方が早く対応がなされている。このことから、労働者の状況というものが見えづらく、改善されにくいということに気づかされる。

読者をよく啓発してくれる良書であるが、各章で取り上げられているトピックについての帰結に関する記述が不足気味な箇所が散見される。また、人体に影響を及ぼす化学物質の説明や医学的な説明は明らかに不十分であり、評者は何度もインターネットで検索をしなければならなかった。著者の専門が元々の美術史で、その後人々とファッションの関係に関心を広げたという経歴からすると致し方ないのかもしれないが、もう少し丁寧な説明があると、より読みやすかったように思う。

私たちは現在が過去より安全な世の中になっていると思いがちだし、全体的に見れば、実際そうなのであろう。しかし本書を読んで痛感したのは、アスベストなど今の基準からすれば「危険」なファッションが、当初は良いものと考えられていたことである。未来の人々から見れば、現代人は冒頭で紹介した危なっかしげに踊る骸骨のように、危険な時代に生きているのだろう。骸骨は永遠に踊り続けているのかもしれない。

<参考文献>

- 立木鷹志 1996 『毒薬の博物誌』 青弓社。
 ハバート、ベン 2020 『毒と毒殺の歴史』 上原ゆうこ訳、原書房。
 船山信次 2008 『毒と薬の世界史——ソクラテス、錬金術、ドーピング』 中公新書。

ブリュノ・ラトゥール著 『社会的なものを組み直す——アクターネットワーク理論入門』

伊藤嘉高訳、法政大学出版局、2019年刊
577頁、5400円＋税

国際ファッション専門職大学
高橋幸治

500ページを優に超える大著である。しかも、極めて難解である。本書はフランスの人類学者、社会学者であるブリュノ・ラトゥールが2005年に上梓した *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-network-theory* の待望の日本語訳であり、アクターネットワーク理論についての解説書だが、邦題の「入門」という言葉を初心者向けとか、平易とか、取っ付きやすいとかいう意味に解して手を出すと間違いなく後悔することになるだろう。本書を読破するには相当な根気と忍耐が必要である。では、なぜ、入門（英題では「introduction」）という紛らわしいサブタイトルが冠せられているのかといえば、

それは、アクターネットワーク理論の核心は読者＝社会学をはじめとする研究者たちの実践の過程の中にこそあり、しかも、その実践は汎用的かつ普遍的な解釈や説明の枠組み、つまりは確固としたフレームワークの構築を目指していないからにはほかならない。アクターネットワーク理論自体について論及した書物は、そもそも原理的に入門という名の出発点にしかなり得ないのである。本書の全体の構成は以下の通りとなっている。

序章 連関をたどる務めに立ち帰るには
第I部 社会的なものをめぐる論争を展開させるには

- はじめに——論争を糧にすることを学ぶ
- 第一の不確定性の発生源——グループではなく、グループ形成だけがある
- 第二の不確定性の発生源——行為はアクターを超えてなされる
- 第三の不確定性の発生源——モノにもエージェンシーがある
- 第四の不確定性の発生源——〈厳然たる事実〉対〈議論を呼ぶ事実〉
- 第五の不確定性の発生源——失敗と隣り合わせの報告を書きとめる
- アリ／ANTであることの難しさについて——対話形式の幕間劇

第II部 連関をたどり直せるようにする
はじめに——社会的なものをたどることは、なぜ難しいのか？
社会的なものをフラットな状態に保つ方法
第一の手立て——グローバルなものをローカル化する
第二の手立て——ローカルなものを分散させ直す

第三の手立て——複数の場を結びつける
結章 社会から集合体へ——社会的なものを組み直すことは可能か

そのボリュームもさることながら、内容的にも慎重を期するがゆえの迂回や婉曲的な表

現が多用されているため、本書を手っ取り早く要約することはどだい無理な相談なのだが、あえて、その本質だけをやや乱暴に取り出せば「社会は存在しない」（本書、466ページ）ということになるだろう。もう少し言葉を付け加えて表現すれば、従来の社会学があらゆる事象や現象の背後に想定し研究の対象としてきた「社会は存在しない」ということである。それまでの手法に取って代わる新たな方途を提示するにしても、この大前提の全否定は、ほとんどの読者にとってあまりにも破天荒に映るだろう。アクターネットワーク理論が社会学の領域を超えてさまざまな分野で注目を集めてきた反面、多くの厳しい批判にさらされ続けているのも無理はあるまい。しかし、その受容のされ難さこそがアクターネットワーク理論の新規性と独自性の証左であり、いかに大きな敵に戦いを挑んでいるかの証明にはほかならない。

ラトゥールは「社会的なもの」を疑う余地のないア・プリオリなものとして措定する従来型の社会学を「社会的なものの社会学」と呼ぶ。「社会的なもの」が当然のものとしてまずあって、それが、政治や経済、文化、芸術といった人間の営為の様態を規定し、駆動させ、変化させる要因として関係しているというわけである。そこに作用している社会的なもの力はもちろん不可視だが、「社会的なものの社会学」者が駆使する理論や法則、つまり、先人たちから継承され、現代の社会学者がさらに磨きをかけた解釈と説明のフレームワークによって、見えざるものの存在は一定の秩序を伴ったものとして見事に取り出すことができる。

それに対してラトゥールは、社会とは人間だけでなくあらゆるものを含めた無数のアクターの絶えざる相互作用によって成り立っており、そのアクターたちの紐帯が別の形態に移行する際、「社会的なもの」が感知可能なものとして世界に立ち現れるのだと述べる。要するにアクターたちの結束の仕方こそ

が「社会的なもの」なのであって、そこには、アクターたちが互いに情報を送り出したり受け取ったりするネットワークが展開されているということである。従って、ラトウールによればアクターネットワーク理論は「社会的なものの社会学」に対して「連関の社会学」であるのだという。

社会的なものは、間接的に把握する動きでしかなく、元々あった連関が少しだけ新しくなったり違ったものになったりする際にわずかな変化が起きる場合に把握できるものである。社会的なものは、決して安定した確かなものではなく、他の非社会的な事象の移り変わりや、揺らぎ、わずかなずれによって生まれる時々の火花でしかない。(71 ページ)

アクターネットワーク理論をごくごくかいつまんでいうと以上のようなことになるのだが、これまでの社会学が開発してきたツール群を捨て去り、非社会的なもの(に、見えるもの)も含めたアクターたちのネットワークをつぶさに検証していくとなると、それは、手に追えないまでに絡まり合った糸を気長にときほぐしていくような途方もない作業なのではないか。もちろんラトウールはそんなことは先刻承知で、にべもなく以下のように書いている。

社会的なものの社会学者は、天使のように軽やかに動き、権力や関係を軽々と(インマテリアリー)動かしていくように見える一方で、ANTの研究者はアリのようにのろのろと歩かねばならず、この上なく小さな結びつきをたどる場合であっても重い道具を運ばなければならない。(51 ページ)

上記のような理由から、ラトウールは「Actor-network-theory」をその頭文字を取っ

て「ANT」と呼ぶ。つまり、連関の社会学とはあたかもアリのような遅々としたスピードでしか実行し得ない、絶望的なまでに愚直な方法論なのである。確かにそんな効率の悪い成否すら定かでない連関の社会学から見れば、多種多様なフレームワークでもっていてもたやすく社会を解説していく「社会的なものの社会学」は、「天使のように軽やかに」見えるのも当然であろう。

しかし、ラトウールはこれまでの社会学が営々と築き上げてきた叡智に依拠することをあくまでも拒絶する。そして、本書のいつ終わるとも知れない旅の途上で心が折れそうになる読者に対しても「ゆっくり進め」「飛躍するな」「あらゆるものをフラットに保て」(すべて 366 ページ)と叱咤する。「ゆっくり進め」は言うまでもなくアクターネットワーク理論の宿命的な大原則であり、「飛躍するな」は社会的なものの社会学が保有している効率的な用具への誘惑を断ち切れということであり、「あらゆるものをフラットに保て」は舞台に立っている数々のアクターに慣習的な序列や優先順位をつけるなどということである。本書の各所には「アクターに従え」という言葉が幾度も登場する。

アクターネットワーク理論は一見したところ、フッサールの現象学的還元や構造主義のアプローチに近いものがあるように思える。しかし、それらとアクターネットワーク理論とのあいだに一線を画す決定的な相違は、アクターたちが不断に送受信し続ける情報の複雑性、つまり、ネットワークの多元性と重層性に重きを置いている点だろう。ラトウールは社会的なものを構成する因子間の関係について、「中間項」と「媒介子」という言葉を用いて以下のような説明を行っている。

中間項は、私の用語法では、意味や力をそのまま移送する [別のところに運ぶ] ものである。つまり、インプットが決まりさえすれば、そのアウトプットが決ま

る。実際のところ、中間項はブラックボックスとして捉えられるだけでなく、たとえその内部が多くのパーツできているとしても、ひとつのものとして扱われる。他方で、媒介子は、きっかりひとつのものともみならずはできない。媒介子は、ひとつのものともされるかもしれないし、物の数に入らなくなるかもしれないし、かなりの数のものともされるかもしれないし、無数のものともされるかもしれない。インプットからアウトプットを予測することは決してできない。(強調は著者、74 ページ)

「社会的なものの社会学」は分析の俎上にのぼった各要素のあいだに介在する作用を中間項として捉え、単一の要因とみなすのに対して、「連関の社会学」はそこに媒介子という不定数の力の紐帯と運動を見る。これは現在のインターネットをはじめとする情報ネットワークの網目構造を想起させ、いかにも脱中心的な、いかにも有機的な、いかにもダイナミックな様態をイメージさせる。実際、ラトゥールもネットワークというやや静的な印象を持つ言葉ではなく、「ワークネット」という、より動的な意味を含ませた言い方を多用している。

しかし、はたしてそれほど複雑に張り巡らされた連関をたどり切り、たどり尽くすということは本当に可能なのか。錯綜するネットワークにおいては部分の微細な変化が影響の連鎖を化学反動的に引き起こし、カオス理論よろしく全体を予測不可能なものにしてしまうのではないか。ラトゥールはアクターたちの結び付きから安易に秩序を抽出しようとせず、それらを性急に解釈しようとせず、理論や体系に昇華させようとせず、ひたすらあるがままに記述せよと言うが、当然のこととして読者の頭の中に去来するそうした疑問に対して、終始、慎ましかで控えめな態度を取り続ける。以下はその実例である。

ANTの解法は、社会的なものの社会学者との論戦に加わるためにあるのではなく、そうした社会学者が陥っているかもしれない矛盾を素早く見つけ出す機会を増やすためにあるのであって、それ以上でも以下でもない。(128 ページ)

ANTはあらゆる理論の宿命から逃れられると思えるほど私は信心深くない。つまり、考えるということは、問題を解決することではなく、問題を設定し直すことでしかない。(447 ページ)

社会的な圏域の早すぎる閉鎖によって設定された狭い範囲をはるかに超えて、連関をたどるという課題が実行されなければ、共通世界を組み立てるという務めを果たすことはできない。ANTはこのことを言うための一手段にすぎない。(490 ページ)

まさに、ここに、本書が包含する難解さがあり、各方面からの攻撃を惹起する所以がある。受け取り方によってはラトゥールのこの姿勢はひどく煮え切らないものに思えるし、アクターネットワーク理論は本当に理論と言えるのか、学問的、さらには科学的なメソッドとして認定し得るのかという疑問がぶつけられるのも、あながちの外れな批判とは言い切れないだろう。筆者もこの大著を読み進めながらところどころ腑に落ちない部分や、にわかには承伏しかねる個所がしばしばあったことは事実である。しかし、ラトゥールにおもねるわけではないけれども、彼がまなざしている究極的な到達点は、タイトルが示す通り「社会的なものを組み直す」(英題では「Reassembling the Social」)ことにあり、そのためには、「社会的なもの」をアクターたちの紐帯によって撚り合わされたものとして想定し、困難ではあるものの分解が可能な、

そして、再結合／再構成が可能なものとして考えざるを得ないのではないかという気がしてならない。

「社会的なものの社会学」は社会を考究し、解釈し、説明することはできる。しかし、それ以上のことはできない。それに対して「連関の社会学」はアクターたちの身振り手振り、あらゆる振る舞いをひたすら注視し、その痕跡を細大漏らさず記述することによって、そこに「社会的なもの」が炙り出される瞬間をひたすら待ち続ける。そんな愚直な精査の果てには、ひょっとするとアクターたちの結束を新たな形態に組み直すことができるかもしれない。アクターネットワーク理論とは、まさにその戦略を達成するための1つの周到な戦術なのではないか。おそらく、本書はそうした難題にあえて挑もうとする者たちに向けた入門的なガイドブックである。そんな筆者の漠然とした憶測を裏打ちしてくれているような、ラトゥールの文章を最後に2つ引用しておこう。

私たちの学問分野の装具を入れ替えて、新たな事物が立てる物音に再び敏感になるろうとするのは、そんなに馬鹿げているのか。そうした事物に然るべき場を与えようとするのは、そんなに無意味なことなのか。(495 ページ)

社会的なものが、一続きの痕跡であるならば、さかのぼってたどる (retrace) ことができる。社会的なものが、組み合わさったものであるならば、組み直す (reassemble) ことができる。(強調は著者、242 ページ)

【紹介】

高原昌彦著

『新版Q & A 現場で生きるアパレル素材の基礎知識』

織研新聞社、2019 年刊
265 頁、2000 円＋税

国際ファッション専門職大学
高原昌彦

2012 年 5 月、『Q&A 現場で生きるアパレル素材の基礎知識』という著書を織研新聞社より出版した。アマゾンの読者評価で「アパレル素材の専門書として繊維素材の研究者のみならず、アパレル業界関係者の日頃の業務に活用できる。さらに、一般の生活者が読んでも衣生活に大変役に立つ内容」という感想をいただき、おかげさまで 2015 年 4 月に第 2 刷が発行された。

その第 2 刷も売れ行き好評で、出版元である織研新聞社より新版として改めて出版しないかという、うれしいお話をいただいた。

おりしも「家庭用品品質表示法」の改定があり、服に取り付けなければいけない「取扱い絵表示」や「品質表示」が大きく改正され、生活者のみならず、ファッション業界やクリーニング業界、そしてその教育現場でも混乱が生じる危険性を多分に含んだタイミングであった。そのため内容の検証を最初から行い、現行の法律に対応できるものとした。また従来のもよりさらにわかりやすい文章に書き換え、イラストや写真の数も増やし、新版として出版した。

最初に出版した本と新版の目次はほぼ共通しており、以下の通りである。

- 第 1 章 「品質表示」って、なに？
- 第 2 章 洗濯とクリーニングの知識
- 第 3 章 繊維の種類と特性
- 第 4 章 糸の秘密